3　～インフィニット・ストラトス・ブレイヴ～　新たな月光のバトラーと蘇る伝説のバトラー

激突皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　・Ｂ　～インフィニット・ストラトス・ブレイヴ～　新たな月光のバトラーと蘇る伝説のバトラー

【Ｎコード】

Ｎ９７６７Ｘ

【作者名】

激突皇

【あらすじ】

突然死んでしまった少年はＩＳの世界へ転生することに。そして彼が転生して十五年・・・彼の持つバトルスピリッツのカードが突如ＩＳに！？さらにクラスメイトのほとんどが女子のＩＳ学園へ入学することに！　果たして彼の運命は！？　そして未来を救った伝説のカードバトラーもこの世界に・・・？

転生

俺が目を覚ますとそこは眩しいほどの白い世界だった

わけもわからずキョロキョロしていると目の前にこれまた真っ白な衣装をまとった女性がいた

「あんたは・・・」

「私はあなたの言葉で言うところの神というものです」

「へ？神様？」

はたしてどういう状況なのだろうか

「まずはあなたに謝らなければならないことがあります」

「謝る・・・ってなにを？」

「あなたをこちらのミスで死なせてしまったことです」

「・・・・・、はぁ！？」

死んだ？俺が？

「マジか！？　俺、死んだんか！？」

「はい、申し訳ありません・・・」

マジか・・・俺、たくさんの息子と孫に囲まれて安らかに死にたかったのに・・・

「それで、お詫びといってはなんですがあなたに提案したいことがあるのですが」

「ん、なんだ・・・？」

俺、天国にいけるのかなぁ・・・

「もしあなたが望むなら、あなたをお望みの世界へ転生させられます」

「なん・・だと・・！？」

「たとえ望まなくても天界と呼ばれる場所で上級のもてなしをさせていただきますが」

マジか、俺が望めば俺の好きな世界へ転生できて、望まなくてもいい暮らしができるってのか

「では、どういたしますか？」

うーん、いい暮らしってのもいいがやっぱ・・・

「・・・よし、俺を別の世界へ転生してくれ」

「わかりました、ではどの世界へ転生しますか」

「そうだな・・・って死ぬ前の記憶がなんかぼやけてるんだが」

「それはおそらく頭を打って亡くなったからだと思います」

「んじゃ、どうすりゃいいんだ」

「でしたら、これが役に立つでしょうか」

すると俺の足元にバッグが現れた

「これは、俺のバッグ？」

「はい、あなたが死ぬ前に持っていたものですそれらを参考にしてはいかがでしょうか」

とりあえず中身を出すか

えぇっと、これはＰＳＰ、ソフトはモンハンか、実物を見ると案外思い出せるな。他は、バトスピ、ラノベのＩＳとロウきゅーぶ！。この中から選ぶしかないか

まぁ、モンハンは・・・モンスターおっかないから除外、ロウきゅーぶは・・・犯罪者予備軍になりそうだからパス

となると後はＩＳとバトスピか・・・うーん

「・・・よし、決めた」

「ではどの世界にするのですか」

「ＩＳ、インフィニット・ストラトスの世界だ」

「ＩＳ・・・わかりました、では自分のＩＳをどうするか決めてください」

「ＩＳか・・・どうすっかな・・・」

なんとなくバトスピのデッキからカードを取り出すとそれは

「・・・ストライク・ジークヴルム」

偶然買ったパックに入ってたＸレア、カッコイイし使えるなと思って入れて、今となっては俺の最高の相棒のカード

「なぁ」

「はい、何でしょう」

「こいつにしたいんだが、できるか？」

そう言いカードを見せる

「はい、できますけど」

「なら、俺のＩＳはこいつ、月光龍ストライク・ジークヴルムだ！」

「わかりました、では今からあなたをＩＳの世界へ転生させます。準備はよろしいですね」

「あぁ、いつでもＯＫだ」

「それではあなたの第二の人生に祝福がありますように・・・」

その言葉を最後に、俺の意識は消えた

転生（後書き）

はい、てなわけで始まりました。
バトスピ×ＩＳの異色のクロス、それぞれファンの層が違かったりしますが自分がやりたかたっからやりました。後悔はしてません

序章　運命の事件（前書き）

しばらくは主人公がＩＳを手に入れるまでの話となります
それでもＯＫならどうぞ

序章　運命の事件

三月某日

この俺、「風間（かざま）　月光（げっこう）」がこの世に生まれて早１５年と半年、進学する高校も決まり後は卒業するのを待つだけとなった

そんな俺は残り少ない中学生生活をエンジョイするため友達と遊び倒していた

「月光、今日の放課後はどうするつもりだい」

こいつはその友達の「三沢（みさわ）　一樹（かずき）」、小学校からの付き合いだ

「ん？　そうだな、たまにはゲーセンにでも駆り出すか？」

「ふむ、それもいいけど制服のままはまずいんじゃないか」

「あー、そっか。　んじゃどうすっかな・・・」

こいつん家はこの前言ったばっかだしゲーセンはだめとなると・・・

うーん・・・

「ちょっとあんた達」

突然後ろから声を掛けられる

「なんだよ」

「レクレーションの準備に必要な道具を買ってきなさい」

そいつらは来週行われる卒業祝いレクレーションの実行委員だった

「なんで俺たちがそんなことやんなきゃなんねぇんだよ」

「なによ、文句あんの？」

「文句も何もそんなの実行委員の仕事だろうが」

「フン、男の癖に口ごたえしてんじゃないわよ」

一人の言葉に他の実行委員の奴らもそうだそうだとか言ってやがる

・・・ったく、また女尊男卑かよ

大天才と言われている篠ノ之　束が女しか動かせないＩＳなるものを創ったおかげで女が男より強いという男尊女卑ならぬ女尊男卑が当たり前の世の中になってしまった

一昔前は男女平等とか騒いどいていざ力を持ったらこれだ、全く気に食わねぇ

「まあまあお嬢さん方、その仕事は僕がやるからどうか怒りを抑えてくれ」

「フフン、三沢は物分りがいいわね。　いいわ、三沢に免じて今回は許してあげる」

「ありがとう、では僕達はこれで」

去り際に一樹は実行委員の奴らに微笑む。　すると一部奴らが三沢君・・・とかつぶやいていた

ここで言っておくが一樹は女好きだ。　それでいてなかなかのイケメンだから女子には昔からもてていた。

「・・・・・・」

その一樹に続いて俺も無言で教室から出て行く

「ったく、あんな奴らの言う事なんて聞かなくてもいいだろうがよ」

俺は一人でもやることがないので一樹と一緒に買出しに来ていた

「そうはいっても女の子達は僕達のために頑張っているんだ、その手伝いをしても悪い気はしないだろう？」

「お前の場合は動機が違うだろうが」

女好きの幼馴染にツッコミを入れつつメモに書かれているものをかごに入れていく

まぁこいつの言ってることも間違いじゃないんだがあの態度が気に食わないんだよな・・・

もっと普通に頼めば俺だって行くっつーの

「さてこれで終わりだ、後は会計に・・・」

『お客様！今すぐここから非難してくだ・・・うわぁぁ！』

「なんだ？」

突然アナウンスが流れたと思ったら途切れた。　しかも非難しろって

「今のアナウンスって・・・」

一樹も異変に気が付き俺と顔を合わせる

そしてアナウンスがまた流れた

『この店にいる客どもよく聞け！　この店は我々が制圧した！』

「なに？」

「制圧・・・？」

そのアナウンスに俺達だけでなく周りの客も同様していた。　そのとき

ドドドドド！

銃声が響き同時に建物が揺れた

客達は一瞬でパニックになり店から出ようとした

「痛！　おい、押すんじゃねえ！」

「月光！僕たちも逃げよう！」

だが再び銃声がして出入口が崩れた

「な！？」

そしてそこにはＩＳを装着した五人ほどの女性が立っていた

「ちっ、少し出ちまったか。　まぁいい、残った奴らを人質にするぞ」

彼女らは俺たちに武器を向けつつ言った

「くそっ、なんなんだよ！」

そのときの俺は知りもしなかった、この事件が俺の運命を変えることになるなんて

序章　運命の事件（後書き）

てなわけで序章です
まだ月光は自分が転生したということは知りません
次回あたりで思い出す予定です

序章　月の咆哮（前書き）

咆えます、月光が
てなわけで、どうぞ

序章　月の咆哮

俺たちは今ライフルを突き付けられ抵抗できない状態にある
つまりこの店を制圧した奴らの人質になっている状態だ

「なんなんだよ、こいつら」

「さぁ、僕に聞かれても」

「そこ！静かにしてな！」

くそっどうにかしねぇと

「よし、警察が来たか、ならこの国にいるＩＳを動かした男を連れて来いと伝えろ」

・・・なに？

「おい一樹、ＩＳを動かした男ってどういうことだ？」

「知らないのかい？この前ニュースでやってて大騒ぎになっていたよ」

「いや、俺ニュースとか見ねぇし」

俺たちは奴らに聞こえないよう小声で話した

「まぁなんにせよ彼女達の目的はそれのようだね」

ＩＳを動かせる男か・・・よし

「一樹、耳貸せ」

「？」

「・・・・・・・・・・」

「な！？本気かい！？」

「そこ！うるさいよ！」

「・・・もう一度聞くが本気かい？」

「あぁ、これなら少なくともたくさんの人が助かるはずだ」

「ふ、君らしいと言えばらしいね。　わかった、僕も手伝うよ」

「あぁ、頼んだぞ」

「おい、あんた」

「なんだ」

見張りのちょっと丸めの女に声を掛ける

「そのＩＳを動かせる男って奴の顔知ってんのか？」

「それはリーダーが知っている、それがどうした」

・・・案外あっさり言ってくれたな、よし

「そいつは俺だ・・・って言ったらどうする？」

「なに！？」

よし、引っかかった！

「あんた、それは本当か！？」

「あぁ、そうさ。　俺がＩＳを動かした男、織斑一夏だ」

そのせりふに他の見張りや人質も注目した

「おい！今すぐにリーダーに知らせろ！」

そう言い一人がここから離れ、後の二人も俺に集まってきた

「ふっ、まさか人質に紛れていたとはね」

「ちゃんとリーダーに教えてもらっておくんだったな」

そう言い一樹にアイコンタクトを取る、すると一樹は頷き行動に移った

（頼んだぜ）

俺はそのまま見張りの奴らの気を引き付けた

「皆さん、今から言うことを静かに聞いてください」

僕の言葉に人質の人たちは注目する

「彼女達が僕の友人に気を取られているうちにここから逃げましょう」

そういうと彼らはざわついた

「静かに、気づかれます。　見張りが少ない今なら逃げられるかも

しれません、この隙にここから逃げましょう」

僕の提案に彼らも頷いた

「こっちです、音を立てず慎重に」

僕の誘導にみんな着いてきた、よし、これなら・・・

（よし、うまくやってるな）

俺がこいつらの気を引き一樹が客を逃がす、なんとかうまくいってるな

「あのときは俺も驚いたさ、なんせいきなりＩＳが動いたんだから」

「へぇ」

「あんたも大変ねえ」

・・・にしてもこいつら言っちゃ悪いがアホか？人質と世間話してるぞ

まぁおかげで作戦がうまくいってるんだが・・・

「おい！貴様ら何をしている！」

振り返るとさっき呼びに行ったやつが二人の仲間を連れて戻ってきていた

しまった！もう戻ってきやがった

「くっ、みんな！走るんだ！」

一樹が人質に指示する、すでに半分以上逃げていたがまだ残っている

「逃がすな！やれ！」

「させるか！」

逃げている人たちに銃を向けた女に俺はタックルをかます

「ぐっ！」

ダメージはなくても突き飛ばすことはできるはずだ

「今だ、行けぇ！」

その隙に人質は逃げる、だが

「きゃあ！」

一人の女の子が転んでしまいそれをさっきの丸めの女が捕まえてしまう

「いや！はなして！」

「どうします？もうこの二人しかいませんが」

「ふん、いないよりはマシだろ。　それよりさっき言ってた奴はどうした」

「あ、はい、こいつです！」

さっき世間話をしていたもう一人の女が俺を指差す

「・・・なんだと？」

「だからこいつですって」

「・・・バカヤロウ！全然違うじゃねえか！」

そういってリーダーらしき女はゲンコツを叩き込んだ

「痛ぁ！」

「なんだって！？」

いっせいに俺に注目してきた

「ちぇ、ばれちまったか」

「フン、なかなか肝が据わってんじゃないか。　だが、相手が悪かったなぁ」

そう言い俺の顎を掴み上げる

「だが人質のほとんどは逃がせたぜ」

「なるほど、それが狙いか、だが一人残しちまったなぁ」

さっき捕まった女の子を掴み上げる

「やぁ、たすけて！おかあさーん！」

「止めろ！その子は離してやれ！」

「黙りな！」

どごっ！

「ぐっ・・・・」

腹に蹴りが入った

「あんたらは人質なんだ、立場を理解しな」

「くっ・・・・」

俺は倒れこみ奴らを見上げる

「お前達、こいつを痛めつけてやりな」

その言葉に他の奴らが俺に近づいてくる

「悪いね、あんたとの世間話楽しかったけどリーダーには逆らえないんだ」

さっきの丸めの女がそう言う、くそっ、ここまでなのか・・・

女の子の叫びや奴らの声がぼんやりしてきた

（ちくしょう・・・俺は女の子一人助けてやれないのかよ・・・！）

意識が遠のく・・・もうだめかと思ったそのとき

『月光！』

声が聞こえた

『俺を使え！』

誰だ・・・お前は

『お前のポケットの中に入っている！』

俺の・・・ポケット？

ポケットに手を入れるとそこにはカードらしきものが入っていた

それに触れると突然頭の中に何かが流れ込んできた

これは・・・俺の記憶？

そうだ、俺はこの世界に転生したんだ

『それを持って俺の名を呼べ！』

お前の名・・・

『俺の名は・・・』

「月光龍・・・ストライク・ジークヴルム！」

すると俺の体になにかが装着された

「な、なんだ！？」

「こいつ、いきなり叫んだと思ったら・・・うわぁ！」

「きれい・・・」

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺は一度咆え、その後のことは覚えてない

だが気が付くと奴らは全員倒れていて俺もその場に倒れた

序章　月の咆哮（後書き）

これで序章終了です
次回はついにＩＳ学園に入学します

新生活編　入学（前書き）

なんやかんやで入学です

新生活編　入学

小説本文
あの事件の次の日、新聞にはこのような記事が書かれていた

『ＩＳを動かす少年、二人目の出現か！？』
先日ホームセンター〇〇にてＩＳを装着した五人のグループがその場にいた客を人質に取り立てこもるという事件が起こりました。その際、人質の一人だった「風間月光」さんが友人の「三沢一樹」さんと協力し、人質を逃がした後、倒れているその五人と人質の女の子一人と一緒に発見されました。その女の子の話によると風間さんはＩＳを装着し五人を一掃しその場に倒れたようです。警察は、この五人を逮捕し風間さんが目を覚まし次第詳しい話を聞く方針です。

そして時は流れ四月

「ったく、俺の受験生活はなんだったんだ・・・」

学園へ向かう電車の中で俺はそうつぶやく、あの後意識を取り戻した俺は警察をはじめ、さまざまな機関から事情聴取をされ、国から「ＩＳを動かした二人目の男」ということでＩＳ学園に入学ように指示された

入学金などもろもろ国が負担するとか何とかで俺がお世話になっている家の人たちは二つ返事で了承した

まぁおっちゃん達にはお世話になりっぱなしだし、負担を減らせるんだからしょうがねぇよな

それから俺は一般とは遅れて試験を受けた、あくまで形だけだったのらしいのだが俺は余裕で合格ラインを超え、おまけに実技の教師との対戦も圧勝した

あのときの教師達の顔はしばらく忘れられないな

「とにかく気を引き締めて以下ねえとな、なんせ・・・」

そう言いながら電車の中を見る

「・・・俺とあの初めてＩＳ動かしたって奴以外みんな女子なんだからな・・・」

入学式が終わり教室に入ると俺は気が重くなった
覚悟はしてたがやっぱきついな・・・
隣の生徒以外全員女子、しかもその全員が俺と隣の生徒に注目している
うぅ、早く担任来てくれー
そう願っていると教師が入ってきた

「全員揃ってますね、それではホームルームはじめますよ」

それからこの人、山田真耶先生がホームルームをはじめ、それから自己紹介となった
そして隣の生徒の番となった

「えぇっと、織斑一夏です、よろしくお願いします」

へぇ、なかなかイケメンじゃねぇの
そんなことをぼんやり考えてていた俺は気づかなかったが後ろでは女子達がもっと何か言わないかと期待していた

「・・・以上です」

すると女子達は壮大にずっこけた、そしていつの間にかいた教師に出席簿で殴られた

「げっ、千冬姉！」

再び殴られる

「学校では織斑先生と呼べ」

その光景に俺は唖然としていた

「あっ織斑先生、もう会議はよろしいのですか？」

「ああ、山田先生。クラスのことを押し付けてすまなかったな」

「いえ、副担任ですから」

そしてその教師が教卓に立つ

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を立派な使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。」

その言葉に教室が黄色い声援で震える

っつー、これが女子校ならではのやつか・・・

俺は耳を押さえ未経験の出来事に自分流に考察した

「…毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

苦労してるんだな、この人も

俺は心の中で同情した

そしてホームルームも終わり休み時間となった

「よう、たしか風間だったよな」

俺が一息ついてると隣の席の一夏が話しかけてきた

「同じ数少ない男同士、仲良くしようぜ」

そう言い手を差し伸べる

へぇ、なかなかいいやつじゃねぇの

「あぁ、こっちこそよろしく。　それと月光でいいぜ、俺も一夏って呼ばせてもらうがな」

俺もその手を握り返し答えた

「そっか、よろしくな月光」

その光景に他のクラスから見に来ていたのも含め女子達が盛り上がった

・・・なぜだ？

「一夏」

一夏に一人の女子が話しかける

「箒」

「ちょっといいか」

そう言われると一夏は俺のほうを向く

「ん？俺のことは気にすんな、知り合いなんだろ」

「あぁ、悪いな」

一夏は俺に軽く謝ると箒と呼ばれた女子と教室を出て行く

「ごゆっくり～」

俺は手をひらひらさせながらそう言い次に行われる授業の準備をした

「・・・であるわけです。　ではここまでで質問のある人？」

一通り説明した山田先生は俺たちに聞いた
一応参考書眺めておいたからあらかた判った
ぱっと隣を見ると一夏がそわそわしていた、なんだ？便所か？
それに気づき山田先生が

「織斑君、何かありますか？」

「あ、えぇっと・・・」

一夏はいいごもる

「質問があったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから。」

そういい先生は胸を張る、・・・やっぱでけぇなぁ

「先生！」

「はい、織斑君」

嬉しそうに答える、・・・本当に教師なのか？この人は

「全然わかりません」

なん・・だと・・・！？

話を聞くと参考書を捨てたらしい・・・マジか

一夏はもちろん織斑先生に殴られた

「再発行してやる、だから1週間で覚えろ」

「い、1週間であの厚さはちょっと……」

「やれ」

「はい・・・」

有無を言わせない迫力で一夏は頷いた、しゃあねぇ、後で教えてやるか

そして再び休み時間

「んでこれはこうなるってわけだ」

「な、なるほど」

俺は一夏にさっきの内容を教えていた、そうしていると

「ちょっとよろしくて？」

「ん？」

「へ？」

突然呼ばれ振り向くと金髪の女子がいた

「まあ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

・・・なんだこいつ

「悪いけど俺、君のこと知らないし」

「まぁ、私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生であり入試主席のこの私を！？」

うっとおしいな

「あいにく、んなことに興味はないんでね」

一夏が何か言おうとしてたが先に俺が言う

「興味がないですって！？どこまで失礼なの貴方達は！」

「なぁ、一つ聞いていいか」

「なんですの！」

俺が言ったことでだいぶご立腹のようだ

「代表候補生って、なんだ？」

その言葉に金髪の顔は唖然としていた

「代表候補生ってのは、国家代表のＩＳの操縦者を決める代表選抜に参加する事ができる人のことなんだとよ」

俺はいつか一樹に聞いたことをうる覚えで話す

「つまり？」

「まぁ、エリートって奴だ」

「そう！エリートなのですわ！」

あ、復活した

「本来なら私のような選ばれた人間と貴方達のような者がクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのですわ。そこのところをもう少し理解していただけないかしら？」

「そうか、そいつはラッキーだ」

「貴方、この私をバカにしてますの？」

「いや、そんなことはないぜホントラッキーだわー」

俺と一夏の棒読みに金髪の顔が真っ赤になっていく

「大体、貴方達はＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね！貴方達二人だけが男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわ！」

「あんたのイメージを勝手に俺らに期待すんな」

「くっ・・・まあでも？　私は優秀ですから、貴方達のような人間にも優しく接してあげますわよ。わからないことがあれば泣いて頼まれたら教えても差し上げてもよくってよ。なにせ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「いや、月光に教えてもらうからいいし、それに俺も倒したぞ、教

官」

「・・・へっ？」

「だから倒したって、でもあれは倒したというか突っ込んできたのをかわしたら壁にぶつかって動かなくなったんだけど」

「そ、そんな・・・あ、あなたはどうなんですの」

「普通に倒したが？」

そう答える俺たちに金髪はまた唖然とする

「そ、そんな・・・私だけと聞いていましたのに・・・」

金髪が唖然としているとチャイムが鳴った

「こ、これで済んだと思わないでくださいまし！」

そう言い残し金髪は立ち去った

なんなんだよ、いったい・・・そういや、あいつの名前なんだったっけ

考えていると山田先生が入ってきて授業が始まった

新生活編　入学（後書き）

セシリアをちょっといじめてみました（オイ）
そんなわけで次は原作通りセシリアと決闘の約束をします

新生活編　決闘（前書き）

予告どおりセシリアと決闘することになります
では、どうぞ

新生活編　決闘

「さて、この時間は実戦で使用する装備について説明する」

二時限目の授業までとは変わり三時間目は織斑先生が担当していた

「その前に、再来週に行われるクラス対抗戦の代表生を決める」

代表戦か・・・ちとメンドそうだな

「自薦他薦でもかまわない、誰かいないか」

推薦式となると・・・

「はい！織斑君を推薦します」

「私も賛成です！」

「私は風間君を推薦します！」

「風間君に一票！」

・・・まぁそうなるわな

「い、いや、俺そんなのやらないぞ」

よし、俺も今から辞退を・・・

「ちなみに他薦されたものは拒否権はないと思え」

・・・マジか

「他にはいないか、ならば投票にするぞ」

投票で決められるのはいやだな、よしならば一夏とじゃんけんで漢の真剣勝負を・・・

「待ってください！納得がいきませんわ！！」

・・・ってまたこいつか、名前なんていったっけ？

「そのような選出は認められません！！男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか！？」

あぁ、オルコットっていうんだ。　てかまた好き勝手言ってんな・・・まてよ、ここであいつを代表者にしちまえば俺がやらずに済むじゃねぇか！ナイスアイディーア！よし

「んじゃお前にゆずｒ」

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体私にとっては耐え難い苦痛」

・・・あ？

「イギリスだって大したお国自慢無いだろ。　世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

一夏も頭にきたらしく言い返す

「なんですって？イギリスにも美味しい料理は沢山ありますわ！！貴方、私の祖国を侮辱しますの！？」

「つーか先に日本を馬鹿にしたのはてめぇだろうが、あん？」

俺も少しキレてるから喧嘩腰に言う

「日本の代々続く歴史や文化を知りもしねぇで日本を冒涜すんじゃねぇ。　それともなにか？先進国様は見た目だけで判断する中身のねぇ国なのか？」

俺達の言葉にオルコットはフルフルと震え

「決闘ですわ！！」

俺達に宣戦布告した。　今気づいたが織斑先生はニヤニヤしていた・・・楽しんでんな、ちくしょう

「いいぜ」

「あぁ、こっちの方が話が早い」

織斑先生は置いといて俺達は宣戦布告を受けた

「言っておきますけど、わざと負けましたらわたくしの奴隷にしますわよ」

「誰がんなことするか」

「で、ハンデはどうする？」

「お、強気だねぇ、嫌いじゃないぜそういうの」

俺達がそう言ってるとオルコットは嘲笑をし、クラスのやつらは笑い出した

「二人とも本気〜？」

「男が女より強いなんてＩＳができる前の話だよ」

「男と女が戦争したら三日も保たないって言われてるのに」

女子達の笑い声に一夏は戸惑っていた。　あぁ、なるほどな

「確かにそうかもな、だがそれは俺達が弱いっつーことにはならないはずだぜ」

俺がそう言うと笑いがピタリと止まった

「まぁそういうことだ、この勝負、ハンデもなんもいらねぇ真剣勝負といこうや」

そう言いながらおれはオルコットに拳を突き付ける

「話はまとまったな。それでは勝負は１週間後の月曜、放課後、第３アリーナで行う。織斑、風間、そしてオルコットは各自用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑先生の言葉に俺達は席に着き授業に入った

授業が全て終わり、俺は一夏の元へ向かった

「一夏、お前特訓とかはどうすんだ？」

「そうだな、どうするかな」

考えてなかったか

「なら俺とやるか？ＩＳを動かしたのはお前の方が先だが俺はいろいろと場数踏んでんだ」

「ホントか？じゃあ頼む・・・」

「一夏」

横から一夏が声を掛けられる

「ん？箒、どうした」

箒って・・・あぁ、さっきのあいつか

「お前、決闘の特訓はどうするんだ、なんなら私が・・・」

「あぁ、大丈夫だ、月光と特訓するから」

「え・・・」

一夏の言葉に箒と言う女子は黙り込む・・・こいつ、もしかして

「いや、でも・・・」

「そういうわけだから心配しなくていいぜ」

「うぅ・・・」

・・・やっぱり、お前も罪な奴だな一夏よ。　・・・しょうがねぇな

「お前も一緒に特訓しねぇか？」

「「え？」」

俺の提案に二人はこっちを向く

「だから、えぇっと、箒だっけ？お前も俺たちの特訓に付き合わないかって言ってんだ」

「お、おい月光」

「わ、私でいいのか」

「あぁ、むしろお前だから頼むんだ」

「私・・・だから？」

箒は俺の言葉の意味がわからないようなので説明する

「つまり、一夏のことはお前の方が知っている、だからいろいろサポートできると思うんだ。　というわけでお前に手伝って欲しいんだが、お前にも都合があるだろうし無理強いはしねぇが」

「そ、そうか、そう言われたら手伝うしかないな、うん」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、俺の意見は」

「「却下だ」」

「えぇ・・・」

俺と箒の被ったセリフに一夏は諦めたようでうなだれた

うん、箒とは結構気が合いそうだな。　そういや苗字なんだっけ・・・ま、いっか

「んじゃ、アリーナの使用許可の申請してくるから先行くぜ」

そして俺は教室から出ようとする、ついでに箒に耳打ちする

「お膳立てしたんだ、しっかりやれよ」

「なっ！？」

箒は顔を真っ赤にしていたが気にせず走っていった

・・・とりあえずここまでの出来事をざっと話そう

まず使用許可の為職員室の前についた俺に一夏からメールで剣道場で特訓すると来たので引き返して剣道場に向かった
そして剣道場に着くと一夏と箒が早くも手合わせをしていた、箒はなかなかの実力者でこれは期待できるなと思ったのも束の間、気づくと一夏は伸されていた
話を聞くと一夏と箒はかつての道場仲間で昔は一夏もそこそこの実力だったらしいのだが三年間帰宅部だったおかげでその腕は鈍っていた
そんな一夏を箒は一から鍛えなおすとかで俺は仕方なくしばらく一人で特訓することになった
だがこんな時間になっては使用許可も取れなくて、これまた仕方なく家へ帰ることにしたのだが・・・

以上回想終わり

「で、なにか用ですか、山田先生」

そして帰ろうとしていると山田先生に呼び止められた

「はい、えっと風間君の部屋が決まったのでお伝えしようと」

「へ？俺自宅通いのはずじゃあないんですか」

「いえ、風間君と織斑訓には急遽学園の寮で生活してもらうことになったんです」

「なん・・だと・・・！？」

そんなことってあるのか？まぁでもいちいち家から来るのも面倒だったしいっか

「それではご案内します」

「でも荷物とかは・・・」

「それなら心配はいらん」

すると山田先生の後ろから織斑先生が現れた

「お前の荷物は家の方の協力で全て寮に運んだ」

マジか、おっちゃん・・・

「それでは山田先生」

「はい、風間君、こっちです」

そんなこんなで俺は寮住まいになったのだった

部屋に向かう途中女子が俺を見て目を光らせてたが・・・なぜだ？

「この１０２４号室が風間君の部屋です」

「はい、わかりやした」

「これが鍵です、それでは私はこれで」

「はい、ありがとうございました」

俺が笑いながら礼を言うと山田先生は顔を赤くして走り去った・・・

なぜだ？

まっ、とりあえず荷物の整理でもすっか

俺は部屋に入り荷物の整理を始めた

「とまぁこんなもんか」

一通り荷物の整理が終わった、つーかホントに全部あんでやんの。
プライバシーもあったもんじゃない・・・

「あとはこれだけか」

俺の荷物とは別にもう一つ小さな箱があった、なんだろうか、開けてみるか

「・・・これは」

その中には俺の好物の一つ、おっちゃんの餃子が入っていた。　そ

して手紙も一緒に入っていたので読んでみる

『月光、これ食べてしっかりやんな　坂田家一同より』

お世話になった坂田家からの選別に目頭が熱くなる

「おっちゃん、舞さん、兄貴・・・」

後で夜食にでも食おう、なんかやる気出てきたな。

とりあえず晩飯まで時間はあるし少し走ってくるか、敷地内なら問題ないだろ

そう思いつきじっとしていられなくなった俺は着替えもせず部屋を出た

「っと、よう」

「む？風間か」

部屋を出ると箒に出くわす

「一夏の特訓は終わったのか」

「あぁ、もう少しかかりそうだがな」

皮肉に言ってるが顔はうれしそうだった

「そっか、まぁ俺は気長に待つさ、お前の邪魔はしたくないからな」

「なっ！？」

箒は顔を真っ赤にした

「わ、私は一夏のことなんて・・・」

「ん？誰が一夏のことなんていった？」

「へ？」

箒の言葉に俺はニヤニヤしながら言った

「・・・はっ！貴様、謀ったな！」

「ハハハ、引っかかったのはお前だろ」

「くっ・・・」

すげぇ悔しそうだな、からかうのはこれぐらいにしとくか

「まぁ、冗談はさておき俺は応援してるぜ」

「風間・・・」

「それと、俺のことは月光でいいからな」

「・・・あぁ、わかった、私も箒でかまわない」

「あいよ、改めてよろしくな」

「あぁ、こちらこそよろしく」

そして俺と箒は握手を交わした

「んじゃ、俺はこれで。　またな」

「あぁ」

俺は箒と別れ、走りに行った

その後帰ってくると隣の部屋のドアに穴が空き、一夏が土下座しているという謎の光景を見た・・・なぜだ？

次の日の朝食の場で一夏に聞いたところ一夏が部屋に入り荷物をいじっていると同質となった箒がシャワーからバスタオル一枚で出てきて一夏を追い出した際、竹刀でドアに穴を空けたんだとか。　・・・マジか、実力者とは思ってたがまさかここまでとは・・・

そんで一夏は箒の機嫌を直す為、土下座していたということらしいなんつーか、前途多難だな。　頑張れ、二人とも

俺は心の中で二人の今後を応援した

新生活編　決闘（後書き）

今のうち言っておきます
月光と箒のフラグは立ちません
箒は一夏を思い続ける方針でいきますんで

新生活編　ブレイヴ（前書き）

いよいよ月光＆一夏ＶＳセシリアです
そしてついに・・・

新生活編　ブレイヴ

そして俺達とオルコットの決闘が決まった日から一週間が経ち、ついに対決の日を迎えた

「んで、お前の専用機はいつ来るんだ？」

そんな俺達は今アリーナの控え室、今日一夏の専用機が来るということになっていたのだが未だに来ておらず待ち惚けを喰らっていた

「さぁ・・・俺が聞きたいよ」

そう言い項垂れる一夏、そのとき山田先生がこっちに走ってきた

「織斑くーん！」

息を切らしながら一夏の前に立つ

「大丈夫ですか、先生」

「はい、それより来ましたよ！織斑君の専用機！！」

やっと来たか、そう思っていると後ろから織斑先生と一夏の専用機らしき物が来た

「織斑急げ、相手も待ちくたびれているぞ」

ぱっとオルコットの方を見ると腕を組んで浮いていた

「これが一夏の・・・専用機・・・」
箒はその白いＩＳを見てつぶやいた
「はい、これが織斑君の専用機、『白式』です！」
「白式・・・」
一夏は白式と呼ばれるＩＳに触れた
「・・・理解できる、これが何のためにあるか・・・分かる！」
どうやら役者は揃ったようだな
「んじゃ、行くとするか、あちらさんも待ってることだし」
「おう、ってお前のＩＳはどうするんだ？」
あ、そういやこいつらにはまだ見せてなかったっけ
「俺のＩＳ・・・いや、相棒はこいつだ」
俺は腰に着けていたカードケースからカードを一枚抜き出す
「カード・・・？それってなんなんだ？」
「だから俺の相棒だって、まぁ実際に見せた方が判りやすいか」
「「？」」

俺の言葉が理解できず一夏と箒は首を傾げる

「久しぶりに行くぜ、相棒！」

そしてカードを握り締め、セリフを叫ぶ

「貫け、闇夜に光る月の牙！　月光龍　ストライク・ジークヴルム！！」

そう叫ぶとカードのストライク・ジークヴルムが光だし、俺の体にＩＳとして装着された

背中には白い機械風の翼、手足には鋭い爪、頭の鼻から上にはストライク・ジークをイメージしたマスクが着いた

「なっ！？」

「カードがＩＳに・・・？」

「ほう・・・」

「これが風間君のＩＳ・・・」

その光景に上から一夏、箒、織斑先生、山田先生が言った

「んじゃ、お前も早く装着しな」

「あ、あぁ」

一夏はまだ信じられないと言う顔をしていた

「まぁ、詳しいことは後で話すよ」

「あぁ、わかった・・・」

一夏は無理やり納得したようで白式を装着した

「さぁ、行くぜ」

「おう、それじゃあ箒、行ってくる」

「あぁ、行ってこい」

箒に見送られ俺達はオルコットの元に向かった

「あら、逃げずに来ましたのね」

「当たり前だ、んなことしたら男が廃る」

オルコットの挑発にしれっと言い返す

「それより本当に二対一でやるのか」

オルコットの提案した対決方法に一夏が確認する

「えぇ、構いませんわ。　私にとって貴方達程度一人も二人も同じですわ」

余裕を見せるオルコットに俺は言い返した

「まぁそうだろうな、お前の専用機は一対多の戦いに向いてる訳だし」

「あら、よくご存知で」

「相手を知るのは戦いにおいて基本中の基本、少し調べさせてもらったぜ」

「お前、いつの間に・・・」

「お前が箒に絞られてるうちに部屋で調べたのさ」

俺の備えに一夏は感心していた

「さて、そろそろ始めようぜ」

そう言って俺は構える

「いいですわ、二度と逆らえないよう徹底的にやらせていただきますわ」

「そうかよ」

一夏とオルコットも構える

「さぁ、踊りなさい、私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

そう言うとオルコットが武器のビライフルで攻撃してきた

「一夏！」

俺の言葉に頷き一夏は俺の後ろに下がった

「悪いが俺は・・・」

そして俺は爪を使ってビームを弾いた

「上品な踊りよりブレイクダンスとかの方が好きなんだよ」

腕を振り、オルコットを鋭い目で見た

そのオルコットはビットを展開して再び攻撃態勢に入った

「27分・・・初見でここまで戦うとは、褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも」

一夏は多少息を切らしながらそう言った

「ここまでは作戦通りだな」

俺は一夏の隣に移動しそう言った

俺達の作戦、それは一夏の専用機が決闘の日に届くということを聞いてから立てたものだ
ＩＳはファーストシフトなるものがあるらしく、それが済むことで初めてＩＳとして完成するらしい
それを知った俺は一夏にある提案をした、それは

「あぁ、月光が防御で俺が攻撃、おかげで俺のシールドエネルギーもまだまだ余裕だぜ」

そう、防御性能に優れたストライク・ジーク、それを操る俺が攻撃を防ぎ、一夏が隙を見て攻撃するという単純かつ確実な作戦だ
だが俺も全部防いだわけでもなく多少のダメージを負っており、逆にいくつか攻撃を当てたとはいえファーストシフトの済んでいないＩＳの攻撃によるダメージは微々たるものでオルコットはまだ余裕

の表情を見せていた

「だが流石にそろそろ決めたいところだぜ」

「残念ですがそれはこっちのセリフですわ」

そう言うとビットで俺に攻撃してきた

「それはもう通じねえぜ！」

俺はまた爪でビームを全て弾いた、ビットは戦いながら少しずづ破壊していたので防ぐのが楽になっていた、そしてその隙に一夏が突っ込む

「もらったーー！」

だがオルコットはにやりと笑い

「それは・・・こっちのセリフですわ！」

するとあの機体からミサイルが発射された

「一夏ぁ！」

一夏は煙に包まれた

「一夏っ・・・！」

対決を見ていた箒は一夏がミサイルを受けたのを見て心配そうな声をあげた

その隣で千冬が鼻を鳴らした

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

だがそう言う千冬は笑っていた

「さぁ、後は貴方だけですわ」

一夏を倒したと確信し俺にライフルを向けていた、だが

「やっと来たか！」

煙が晴れるとそこには先ほどまでの白とは比べ物にならないほどの純白のＩＳに包まれた一夏がいた
その手にあるブレードも、≪雪片弐型≫へと姿を変えていた

「まさか、ファーストシフト！？貴方、まさか今まで初期設定で私と戦っていたのですか！？」

「そうさ、そのために俺が時間稼ぎの作戦を立てたのさ」

「待たせたな、月光！」

新たな姿で俺の隣に並ぶ一夏

「約三十分か、結構掛かったな」

「そんな・・・じゃあ私は貴方達の作戦にまんまと引っかかったということですの！？」

「まっ、そういうことだ。　つーわけで一夏もやっとまともに戦えるようになったところで、俺も行くぜ！」

「な！？、貴方もなにかあるんですの！？」

「あぁ、見てな！これが俺達の力だ！！」

俺は腰のカードケースからまた一枚抜き出す

「別のカード・・・？」

「いくぜ！　ブレイヴ！砲凰竜フェニック・キャノン！！」

そう叫ぶとカードが光りだし姿を変え、それに描かれていたフェニック・キャノンが現れた

「何ですのそれは！？」

それに答える代わりのようにブルーティアーズの残りのビットを背中のキャノン砲で破壊した

「なっ！？」

『邪魔者は消した、あとは本体だけだ、いくぞ月光！』

「「しゃ、喋った！？」」

フェニック・キャノンが喋ったことに一夏とオルコットだけでなく見ていた箒や先生達も驚いていた

「あぁ、来い！フェニック・キャノン！！」

そしてフェニック・キャノンは姿を変えて翼とキャノン砲になると月光の背中に合体した

「合体した・・・」

「これが、俺達の力！合体（ブレイヴ）だ！」

そう言うと俺はオルコットを見て構える

「さぁ」

一夏も雪片弐型を構えた

「これで終わりだ！」

俺と一夏は同時にオルコットに突っ込んだ

新生活編　ブレイヴ（後書き）

やっと月光を戦わせることができ、ブレイヴも出すこともできました
次回は決着、そしてあの人が・・・

新生活編　伝説のカードバトラー（前書き）

ＶＳセシリア決着です

そしてついにサブタイトルの人が・・・

「はあぁ！」

「くっ！」

俺が放ったキャノン砲の銃弾をオルコットはかろうじてかわす、だがそこに一夏が突っ込む

「うおぉぉ！」

「ぐっ・・・きゃあ！」

ライフルで受け止めるが一夏の姿を変えた武器、雪片弐型の威力に吹き飛ばされる

「そこだぁ！」

すかさず俺がキャノン砲を放つ

「このっ！」

だがライフルの銃弾に相殺された

「防戦一方だな、オルコットは」

それを見ていた織斑先生がそう呟く、それに箒が相槌を打った

「えぇ、一夏のＩＳがファーストシフトを終え、まともに戦えるようになったとはいえ、ここまで一方的なのは・・・」

「あぁ、風間のあのＩＳ、カードが武器になったりＩＳになるなんて・・・聞いたことがないぞ」

そう二人が話している間に戦っていた三人は動きを止め、対峙していた

「流石、代表候補生は伊達じゃないってことか」

「そちらこそ、どうやら私は貴方達を甘く見すぎていたようですわ」

「そうかい、そりゃどうも」

「でも、そろそろ決めますわよ！」

そう言ってライフルを構える

「あぁ、こっちも行くぞ！」

一夏が武器を構え、俺もキャノン砲の銃口を向ける

そして一瞬の沈黙が流れた後

「はあぁ！」

「行っけぇ！」

俺達は同時に放った。　お互いほとんどのエネルギーを込めた一撃
はしばらくぶつかった後相殺され辺りに煙が舞う
そこに一夏が加速して突っ込む

「うおぉぉぉぉお！」

「なっ！？」

煙が晴れる前に現れた一夏に反応できずオルコットは攻撃を受け、
ブザーが鳴り響いた

『勝者、織斑一夏、風間月光』

「よし、勝った！」

煙が晴れるとそこには気絶したオルコットを抱えた一夏がいた

俺は控え室へ戻った、一夏はオルコットを医療班に任せてから戻るとのこと

「ふぅ、疲れた」

「なかなかやるな、お前」

戻ってくると箒と織斑先生と山田先生が待っていた

「だが時間を掛けすぎだ、お前の実力ならもっと早く倒せたであろう」

「いやー、でも一夏のファーストシフトってやつを済ませたかったですし、それにああいう決め方の方がかっこいいじゃないですか」

「馬鹿者、戦いにかっこよさなど必要ない」

怒られてしまった

「でも本当にお疲れ様です、風間君」

「ありがとうございます」

そんなやり取りをしていると一夏が戻ってきた

「よっ、とと」

「お疲れさん」

「あぁ、勝ったんだよな、俺達」

「おお、お前が決めてな」

「だがお前は機体と風間に助けられすぎだ」

「うわ、厳しいな千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

出席簿で叩かれる一夏、てかどこに持ってたんだ・・・？

「お前の最後の一撃、あれは大量のシールドエネルギーを消費するものだ。　風間がお前を守ってなければ刃が届く前にエネルギーが尽きて負けていただろうな」

「そうだったのか・・・」

「とはいえ、お前らの勝ちだ。　よくやったな」

最後に織斑先生が俺達に賞賛の言葉を贈った、一夏は信じられないものを見るような目で織斑先生を見ていた

「それで、どうするんだ？」

唐突に箒が尋ねてきた

「なにがだ？」

「お前ら二人が勝ったんだからクラスの代表は二人のどっちかになるんだろう？」

「「あっ・・・」」

そういやそんなことあったっけ、すっかり忘れてた

「どうする？」

一夏が聞いてくる、しょうがない、ここは漢の真剣勝負・・・

「じゃんけんで決めよう」

「「えぇ・・・」」

二人だけでなく、織斑先生や山田先生にも呆れられてしまった

「・・・ってのが俺がＩＳを動かした経緯ってわけです」
織斑先生に俺のＩＳについて聞かれたので一夏やも箒いる中説明した
「たしかニュースでもよく取り上げられてたよな、ＩＳを動かして強盗を倒したってやつ」
「んで、ここからがこいつのことだ」
そう言ってカードを取り出す
「こいつはバトルスピリッツって言うカードゲームのカードで今のところＩＳになるのはこいつだけだ」
「これが、月光のＩＳ・・・」
「未だに信じられないな、こんなカードがＩＳになるなんて」
『こんなカードとはなんだ、こんなカードとは』
「「え？」」
一夏と箒は突然聞こえた声に上を向く。　そこにはカードに描かれていたスピリット、ストライク・ジークヴルムがいた
「「・・・・・、えーーーーーーーー！！」」
『なんだ、化け物でも見たような声を上げて』

「いや、そら驚くだろ。　いきなり出てきたら」

「げ、月光、こいつはいったい？」

「ストライク・ジークヴルム、俺のＩＳで俺の相棒だ」

『よろしく』

「あ、あぁ・・・」

「こ、こちらこそ・・・」

戸惑いながらも答える一夏と箒、そして千冬は

「全く、お前には驚かされるな・・・で、あの合体したキャノン砲についても話してもらおうか」

「あぁ、はい。　あれはブレイヴと言ってスピリットに合体することで真の力を発揮するものです」

「そういやあいつもしゃべってたよな、えぇっと、なんていったっけ？」

『フェニック・キャノンな』

「そうそうそれ・・・ってまた出た！」

いきなり出てきたフェニック・キャノンに一夏が盛大に驚く

「まぁこのようにブレイヴもスピリットと同じように自我を持ってる、他にも後二体いる」

「その二体も合体するのか？」

「あぁ、ブレイヴによって能力や形状違う。　状況でブレイヴを使い分けるのもバトスピと同じで重要なんだ」

「なるほど、なかなか興味深い話が聞けた、風間、もう戻っていいぞ。　しっかり休養を取っておけ」

「はい」

織斑先生はそう言い行ってしまった、さて、俺も戻るかな

「んじゃ、俺は戻るがお前らはどうする？」

「あぁ、俺達も戻るよ」

そして俺達も寮へと戻っていった

月光達の戦いが終わり、それぞれが自分の部屋で休んでいたそのとき、別の次元では一人の少年が目覚めようとしていた

・・・起きて・・・ダン・・・

（マギサ・・・？）

自分を呼ぶ声に目を覚ます

「ここは・・・どこだ・・・？」

彼は見慣れない場所にいた。浮いているような、沈んでいるような、不思議な感覚だった

「ダン・・・」

呼ばれて振り返るとそこには懐かしい人物がいた

「マギサ・・・やっぱりマギサだったんだな」
かつてこの少年と旅をし、共に世界を救った大魔法使い、マギサ
「久しぶりね、ダン」
「マギサがいるってことはここはグラン・ロロか？」
「いいえ、ここはグラン・ロロとはまた違う別の世界。　あなたの力を必要とする世界よ」
「俺の・・・力・・・」
そこであることを思い出す
「マギサ！未来は、未来は救われたのか！？」
「えぇ、ダンのおかげでみんな助かったわ」
「そうか・・・よかった」
未来の人達や仲間達の無事を確認してほっとする
「ダン、あなたにはまた世界を救ってもらいたいの」
「俺が・・・？」
「えぇ、あなたと・・・スピリット達でね」
そう言うと彼のデッキケースが光りだした

「これは・・・！」

「ダンの新しい力よ、その力であの世界を邪悪から救って」

そしてマギサは少年から離れていった

「待ってくれ、マギサ！」

「あなたならきっとできるわ・・・頼んだわよ、馬神　弾」

その瞬間、ダンの意識は途切れていった

新生活編　伝説のカードバトラー（後書き）

やっと出せたぜ、ダン！

月光達と絡むのは次々回辺りになりそうですが

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9767x/

IS・B　～インフィニット・ストラトス・ブレイヴ～　新たな月光のバトラー

2011年11月17日17時18分発行